

研究ノート

「蘭亭序」はなぜ『文選』に採録されなかったか

祁小春

- 一 「蘭亭序」が『文選』に採録されなかった理由についての諸仮説
 - 1. 内容及び表現から見た説
 - 2. 文体から見た説
 - 3. 「蘭亭序」は偽作であるから、当然採録されることはないとする説。
- 二 「蘭亭序」が『文選』に採録されなかった理由についての仮説
- 三 小結

キーワード：昭明太子は王羲之の文学才能と
為人を認めなかったのではない
か？

王羲之の名作「蘭亭序」は後世余りにも有名になったが、梁の昭明太子蕭統の『文選』に採録されなかったのはなぜか。

この問題は、王羲之研究における一つの謎として残されている。早くも宋代からすでに学者達の間で議論され、今日に至ってもなお終止符を打つことはなく、議論が続けられているのである。小文では、この問題を取り上げて旧説を

紹介するとともに、いささか卑見を記してみようと思う。

一 「蘭亭序」が『文選』に採録されなかった理由についての諸仮説

仮説は実に様々であるが、大別すれば、

- 1. 内容及び表現から見た説。
- 2. 文体から見た説
- 3. 「蘭亭序」の真偽から見た説の三通りである。

1. 内容及び表現から見た説

A 「蘭亭序」の内容或いは表現の面において、いくつかの欠陥があるから、採録されなかったとする説である。つまり「蘭亭序」にある「天朗氣清」は元来秋の景色を述べたもので、春には合わず、「絲竹管弦」の語も意味上重複する嫌いがあるという。これを主張する人は、宋の陳虚中、陳正敏、王得臣等である⁽¹⁾。更に「蘭亭序」の内容には悲観的色彩が甚だ強く、

(1) 宋代の陳正敏『遜齋閑覽』に、彼の季父陳虚中の語を引用して「王右軍『蘭亭序』以「天朗氣清」自是秋景、以此不入選。余亦謂「絲竹管弦」亦重複」という。これに対する反論として、同時代の王慤は『野客叢書』卷一に、僕謂不然。「絲竹管弦」本出前漢『張禹伝』。而三春之季、「天氣肅清」見蔡邕『終南山賦』。「熙春寒往、微雨先晴、六合清朗」見潘岳『閑居賦』。「仲春

令月、時合氣清」見張子平『婦田賦』。安可謂春間無天朗氣清之時。右軍此筆、盖直述一時真率之會耳。修禊之際、適值天宇澄霽、神高氣爽之時、右軍亦不可得而隱、非如今人綴輯文詞、強為春間華麗之語、以圖美觀。然則斯文之不選、往々搜羅之不及、非固遺之也」とある。

超脱的な内容がない。仏教に精通した昭明太子の理念に合わないので、入選させなかったのであるという晁氏の主張もある⁽²⁾。

B 六朝期には、老、荘の玄理が重んじられ、荘子の「生死を斉しとす」、「得喪を忘る」ことが尚ばれたが、「蘭亭序」の内容は、明らかに老荘のこの思想に反し、生死の問題に対して甚だ悲観的であるから、昭明太子の好みに合わなかったからと言う。これは清の喬松年の説である⁽³⁾。また近人の王瑤氏も、以上の晁、喬二氏の説に基本的に賛成している⁽⁴⁾。

C 福本雅一氏は、「蘭亭序」の文章そのものが、厳密に推敲されたものではなく、内容、修辞などにおいても相当問題があり、決して名文とは言えず、入選しなかったのは当然であると指摘している⁽⁵⁾。更に清水凱夫氏は、『文選』の選文において、君臣関係を重視するという内在的な収録基準があり、これが「蘭亭序」を取り上げなかった具体的な理由であると説いている⁽⁶⁾。

2. 文体から見た説

清の陳衍は、昭明太子が駢文を重んじていたが、「蘭亭序」は駢文体ではないので、採録しなかったのではと主張する⁽⁷⁾。この説を受け継いだのが、近人の陳中凡、王運熙、楊明諸氏である⁽⁸⁾。

3. 「蘭亭序」は偽作であるから、当然採録されることはないとする説。

二 「蘭亭序」が『文選』に採録されなかった理由についての仮説

以上諸家の説を簡単に纏めたが、勿論それぞれの説にはそれなりの説得力があったに違いないと思う。しかし、以上の諸説以外にも他の可能性を探るべきであり、或いは諸説を補うべき点もあるのではないかと考える。

南朝梁の蕭氏一族は、王羲之の為人、宗教、文学などの面で、或いはその優れた書芸術に対してさえ、後世の人ほどには敬服しておらず、むしろ逆に強い反感を持っていたのではないかと思う。すなわち、王羲之の為人としての傲慢さや、道教信仰の不徹底的なこと、或いは文学的才能の欠如に対して、王羲之をさほど尊敬すべき人物とは認めていなかったのではないか。このことは、以下の三点から考えることができる。すなわち、第一に、王羲之の文学上における才能の欠如、第二に、王羲之の為人、第三に、王羲之の書芸術のみは認めたものの、決して後来の唐太宗李世民ほど書聖として崇拜はしなかったこと、以上の三点である。以下はこの三点について述べてみよう。

第一に、王羲之の文章として伝存するものは、「蘭亭序」と日常の尺牘を除くと、殆ど皆無に

(2) 宋の桑世昌『蘭亭考』に引く晁氏の説に、「右軍器宇・詞・翰三者俱優、而以『曲水序』中有樂極悲來、嗟悼之意。『文選』中所収王元長『曲水詩序』、『曲水序』不収。豈昭明深於内学、以羲之不達觀之理、故所遺耶」とある。

(3) 清の喬松年『羅廡亭札記』に「六朝談名理、以老莊為宗、貴齊死生、忘得喪。王逸少『蘭亭序』謂一死生為虛誕、齊彭殤為妄作、有惜時悲逝之意、非彼時之所貴也。故『文選』棄而不取。」とある。

(4) 『中古文学史論』の「文人与業」を参照。北京大学

出版社、一九八六年。

(5) 『文房雜話』一九七八年第七号。

(6) 『清水凱夫《詩品》《文選》論文集』の「王羲之『蘭亭序』不入選問題研究」一文。首都師範大学出版社、一九九五年。

(7) 清の陳衍『石遺室文集』。

(8) それぞれ王運熙、楊明の『魏晉南北朝文学史批評』(上海古籍出版社、一九八九年)、陳中凡『漢魏六朝散文選』(上海古典文学出版社、一九五二年)を参照。

近いほど少ないと言ってよいだろう。勿論、他にも後世に伝わらなかった文章があったかもしれない。しかし、彼と同時代の文章を善くした人物の文学作品は現在尚多く伝存していることから推測すれば、王羲之はあまり多くの文章を作らなかったか、或いは文章を作ること自体苦手だったのではないかと考えられる。さらに、もし今本「蘭亭序」が偽作であるとすれば、王羲之の文章と言えるものは『臨河叙』という僅か百五十字の短文のみとなるわけである。また普通、魏晋士族の伝記文献中に、文を善くすると言う評語はしばしば目にし、仮に文学に優れた人でなくても、文化素養があったというお世辞の意味で一応そのように記されている。だがこのような溢美の辞は、凡そ王羲之に関する文献記録の中には見当たらず、さらに劉義慶の『世説新語』の中に、王羲之の「蘭亭序」に関する記事はあるが「文学篇」に置かれておらず、羲之が石崇の文を羨んでいたこととして企羨篇に入れられたことから、王羲之はよほど文章が苦手だったのではないかと察せられる。まして羲之の数少ない、或いはただ一篇しかないという文章「蘭亭序」にしても、それほどよくできたものとは思わない人が多い。中でも、「蘭亭序」の病弊を最も痛烈に批判したものとして、前記福本雅一氏の「蘭亭嫌い」((5)既出)がある。同氏は特に「蘭亭序」にあらわれた文字の重覆錯出の異常現象を指摘した末に、「蘭亭序」は「一時の感興に筆が走ったので、推敲を経たる文章ではない証拠である。理論が明晰でないことも、これと係りがある。つまりムードに酔った率意の作で、厳密に検討すれば、四六の駢文としても、それ程秀れたものと思われない。到底、昭明太子の鑑識にかなう代物ではないのである。『文選』に洩れたのも当然であると、私は考える。」という感想を述べている。

確かに王羲之の文章中に、文字の重覆錯出の現象が頻出しており、このことは今日伝存する多くの尺牘を読めば分かるので、ここにいちいち例を挙げることは省略する。しかし羲之の書作品では、凡そ重覆の字はみな形を変えて書き、重覆の嫌いを避けているのに、何故文章においては全く気にしなかったのか。一説によると、王羲之は文章をどのように書くかと言うことよりむしろ文字をどのように書けばよいかという方により関心があったという。錢鍾書氏の著書『管錐編』(中華書局、一九七九年)第三冊の一〇六条に、「蘭亭序」に現れた文字の重覆錯出の現象について、「顧羲之於字体不肯複犯、而於詞意之複犯了無避忌、豈搏心揖志在乎書法、文章本視為餘事耶」と論じている。思うに、昭明太子が『文選』に「蘭亭序」を採録しなかったのは、王羲之にはもともと文章が少なく、またその代表作である「蘭亭序」にもこのような病弊が存在し、さらに王羲之自身は文章が苦手であって、文章は本より「餘事」として重視しなかったことがその原因の一つとなったのではなかろうか。『世説新語』企羨篇に、「王右軍は、人々が彼の『蘭亭集序』を『金谷詩序』に比べ、また、自分を石崇に匹敵することができたので、たいそう喜ばしそうであった」という記事がある。王羲之が文章を善くし、かつ優れていたとすれば、「蘭亭序」或いは『臨河叙』のようなごく平凡な作に対して大変気に入って、喜んでいたとはどうにも不思議な事としか考えられない。私はむしろこの事が、王羲之にとっては「蘭亭序」のような文章を作るのがすでに精一杯であり、これ以上の良い作品を作ることができなかったのだと言うことを示唆しているように思われる。

第二に、王羲之の為人

昭明太子の異母弟にあたる梁元帝蕭繹が『金

楼子》(『全梁文』卷五十三) 卷四に次の論述がある。

王懷祖(述)之在会稽居喪、每聞角声即灑掃為逸少之弔也。如此累年、逸少不至。及為揚州、稱逸少罪。逸少於墓所自誓、不復仕焉。余以為懷祖地不賤乎逸少、頗有儒術。逸少直虛勝耳。才既不足、以為高物、而長其狠傲。隱不違親、貞不絕俗、生不能養、死方肥遯。能書何足道也。若然、魏颺之善画、綏明之善碁、皆可凌物者也。懷祖構怨宜哉。

これは蕭繹が王羲之と王述の不和事件を評して、本人の感ずるところを述べたものである(詳しくは『晋書』卷八十羲之本伝及び『世説新語』仇隙篇を参照)。要するに蕭繹にしてみれば、王羲之の人間像としての印象は「才既不足、以為高物、而長其狠傲。隱不違親、貞不絕俗、生不能養、死方肥遯。能書何足道也」というものであった。王羲之の為人や性格などにあらわれた人間的欠陥を指摘したこの説に、昭明太子蕭統をも含む蕭氏一族の見方が多少とも反映されているように思われる。蕭繹が、王羲之を「才既不足」と嘲笑したのは、明らかに王羲之における文学的才能の欠如を指すと解釈してよいであろう。蕭繹の「才既不足」の評語は注目されるべきである。

周知のとおり、梁朝における蕭氏一族、即ち武帝蕭衍及び息子の昭明太子蕭統、簡文帝蕭綱、元帝蕭繹はいずれも南北朝期の文学界における重要かつ代表的な人物である。従って、彼らの目から見ると、王羲之の文学的才能はやはり不足と映ったに違いない。また弟の蕭繹の王羲之に対する違和感を昭明太子が全く持っていなかったとも限らない。因みに、南朝梁の天聖末年、西魏が江陵を陥れた時、蕭繹が、父の武帝の集めていた多くの大小王の書跡を焼き捨てたこ

となども、王羲之に対して不満の気持ちを抱いていたからであろう。それを唐の太宗が臨死する前にどうしても王羲之の書を墓に持っていきたいという気持ちに比べてみれば、誠に対照的なものと言えよう。

第三に、蕭氏一族は王羲之に対してただその書芸術のみを認めたものの、決して唐の太宗ほど書聖として崇拝していなかった。蕭繹の言う「能書は何ぞ道うに足らんや」には、正にこのような心境が流露していると考えられる。蕭氏一族が王羲之の書芸術に対して、後世の人ほどには敬服していなかった。その背景をもう少し探ってみよう。

王羲之が生きた東晋時代から、唐以前までの間に、彼は決して書聖という存在ではなかった。周知のことだが、唐の太宗は王羲之の書に傾倒し、自ら『晋書』王羲之伝の論贊を撰し、その中で歴代の書家を評した末に、

所以詳察古今、研精篆素、盡善盡美、其惟王少逸乎。……心慕手追、此人而已。其餘区区之類、何足論哉。

と賛美している。このように、王羲之は帝王の力により、遂に中国歴史上における唯一の書法聖人となってゆく。東晋南北朝期において、王羲之の書が決して「独歩」でなかったことは、清水凱夫氏の「唐修『晋書』の性質について(下)——王羲之伝を中心として——」(『学林』誌第二十四号、一九九六年)の一文に詳細な考証があるが、ここでは同氏が引用されていない事例を挙げることにする。

『晋書』本伝に「羲之書初不勝庾翼、郗愔。及其暮年方妙」とあるが、この記事は梁の虞龢『論書表』から引用されたものと思われる。同表に「羲之書在始時未有奇殊、不勝庾翼、郗愔、迨其末年、乃造其極」(『法書要録』卷二)とあり、さらに宋の羊欣『采古来能書人名』の庾翼

の条に「善隸行、与書羲之齊名」（『法書要録』卷一）とある。また『陶隱居与梁武帝論書啓』の陶啓に「逸少自吳興以前諸書、猶為未称、凡厥好跡、皆是向在会稽時永和十許年中者」（『法書要録』卷二）という。これらによると、王羲之在世中、その書は人より劣っていた時もあり、当然のことながら書聖ではなかった。実は当時の人に書聖と見なされた人物は三国の呉の皇象、魏の胡昭だったようである。例えば王羲之と同時代の人葛洪が『抱朴子・内篇』卷十二「辨問」に次の記述がある。

世人以人所尤長、衆所不及者、便謂之聖。故善困碁之無比者、則謂之碁聖。故嚴子卿、馬綏明於今有碁聖之名焉。善史書之絶時者、則謂之書聖。故皇象、胡昭於今有書聖之名焉。善図画之過人者、則謂之画聖。故衛協、張墨於今有画聖之名焉。善刻削之尤巧者、則謂之木聖。故衛張衡、馬鈞於今有木聖之

名焉。

すなわち、東晋南北朝期において、王羲之は「書聖」ではなく、その書も「独歩」ではなかったのであろう。またこのことから、蕭繹の「能書は何ぞ道うに足らんや」という王羲之に対する貶辞の背景を理解することもできよう。

三 小結

以上述べた三点をまとめて言えば、昭明太子が『文選』に「蘭亭序」を採録しなかった理由の一つとしては、弟の元帝蕭繹と同様、王羲之に対してある程度の違和感を持っていたからではないかと考えるのである。勿論この論は目下のところ推測に過ぎない部分も多いが、更なる確証を得るまで、一応問題としてここに録しておく。

